

令和8年度 第1回小松市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和8年7月16日(木)
開会 午前11時00分 閉会 午前11時40分
- 2 会 場 小松市役所3階会議室
- 3 出席者 小松市長 宮橋 勝栄(議長)
小松市教育委員会
教 育 長 山本 民夫
委 員 中惣 恭子
委 員 村井 啓介
委 員 浅蔵 一華
委 員 表 幹也

(事務局関係)
総合政策部長 本谷 徹
総合政策部 総合政策課長 太田 司
総合政策部 総合政策課主査 秋野 力
教育委員会事務局 事務局長 藤井 勝司
教育委員会事務局 教育庶務課長 中川 久美子
教育委員会事務局 学校教育課長 新名 孝
教育委員会事務局 教育研究センター所長 中田 一宏

- 4 討議事項 ・学びの多様化学校について

5 会議の経過及び発言

○開 会

○宮橋市長あいさつ

- ・今回は学びの多様化学校をテーマに進めていきたい。全国的にもそうだが、本市も不登校児童生徒が増加傾向にあり、これまで以上に対策を講じる必要がある。
- ・子どもたちの学びたいという思いにしっかり答えていくことが、これからの時代に非常に大切だと考える。
- ・専門的な対応を行う教育研究センター、子どもたちの居場所となれる未来型図書館、そして新たな学びの多様化学校を併せ、三角形の関係で良い機能・相乗効果を持たせたい。
- ・令和10年度開校を目指しており、定期的に整理していく必要がある。委員の皆様から率直なご意見をいただきたい。

○討議事項 1

・学びの多様化学校について

<議長>

- ・議題「学びの多様化学校」について説明をお願いしたい。

<教育委員会事務局 新名学校教育課長> (別添資料に基づき説明)

<中惣委員>

- ・子どもたちが毎日学校に来られるようにすることだけでなく、将来の社会参加につながる教育に期待する。
- ・不登校の理由は様々であり、担当する教員の資質や知識が重要だと思う。
- ・子どもたちや保護者、市民の皆様に「特別な学校」という誤解や偏見を持たれないよう、丁寧な周知・説明が必要だと感じている。

<議長>

- ・担当する教員は、特別支援に長けている方がいいのか、もしくは生活指導に長けている方がいいのか、どちらも必要か。

<新名学校教育課長>

- ・先進地の視察を通じて、教育相談機能を備え、子どもの意向を汲みながら一緒に作り上げようとする姿勢の両方が必要だと感じた。

<議長>

- ・宮城県の事例では、通っている子どもたちが積極的にテレビに出て、「学校が楽しい」「学校に来て良かった」「ここに来たおかげで勉強ができるようになって志望校に合格できた」と言っていた。
- ・学校に行けなくなった理由は人それぞれだが、自己肯定感を持っていれば、閉鎖的な場所ではなくなり、偏見も生まれることはないと感じた。自己肯定感を一緒に見つけ、しっかり育むことができる指導が必要だと思う。

<村井委員>

- ・令和7年度の中学校不登校生徒数は205名。子どもの数は減少している中で、不登校の人数が増えているということは、社会的にもかなり難しい問題だと思っている。
- ・多様化学校の開校当初の在籍想定人数は15人程度と少ないため、安易な選択肢にならないよう、本来の学校の存在意義とのバランスが大事だと思う。入校の要件や面談が鍵になるのではないか。
- ・計画訪問で先生から、小学校で不登校気味になりそのまま中学校も不登校となることが多いと聞いた。早い段階で根本的な原因を見定める対策も必要ではないか。

<議長>

- ・子どもの状況を把握し、原因を突き止めながら取り組むなど、基本的にファーストステップは各学校での対応。それでも困難な事情がある場合は、面接等を経て多様化学校への入学を許可する基準作りをしていく必要がある。

<藤井事務局長>

- ・都合よく安易に入学できてしまうと意味がないため、基本的には自分の学校に行けるよう、各学校で最大限努力していただくことが第一である。

<山本教育長>

- ・入校時の面接は子どもだけでなく保護者も一緒に受けてもらう。年間複数回の機会を設けて実施していく予定。

<浅蔵委員>

- ・多様化学校を勧める基準が各先生によって違うことにならないよう、基準は明確にしていきたい。

<議長>

- ・人間関係や生活習慣の乱れなど理由は人それぞれだが、本人の「勉強したい」という思いが一番大事である。それが自分の将来を考えていくことにも繋がる。

<新名学校教育課長>

- ・学びの多様化学校では特別カリキュラムを組むことが可能で、一定期間休んで学ぶことができなかった分をその各教科の中で学び直すことができ、それぞれ違う課題を行い、自分のペースで学べる仕組みは作りやすい。

<表委員>

- ・対象者は割と学力の低い子どもをイメージしていたが、逆に学校の勉強は全て理解し、もっと違う勉強をしたいという子が対象になる可能性もあるのか。

<議長>

- ・本市の「伸ばしこぼれなく」という方針にもあるが、学力が非常に高いギフテッドのような子が、集団の中で馴染めないというケースも可能性はある。みんなで学ぶことが不得意という子はいると思っている。

<表委員>

- ・いくつか視察も行っているようなので、各施設の良いところ取り入れながら少しでも

早くスタートしてもらえるとありがたい。

<村井委員>

- ・中学校のその先につながるものがあると、より意義のある施設になると思う。

<議長>

- ・高校でも、大人数の中では勉強できないという子に関して、各学校に別室を用意することも大事なことになるかもしれない。教育委員会や高校側とも連携していくことが大事だと思う。

<浅蔵委員>

- ・今は中学生を対象としているが、小学生の頃から不登校傾向になる子どももいる。小学校の先生方も学びの多様化学校について理解し、保護者に伝えられるようにすることも必要だと思う。

<山本教育長>

- ・令和10年開校となると、現在の小学校5，6年生も対象になってくるので、小学校の先生方にも理解してもらおうよう、校長会を通じて説明している。
- ・将来的には小学生も通うことを考えていく必要があると思う。

<新名学校教育課長>

- ・宮城県白石市には両方あり、市内の教員が研修に行って「こういうお子さんは何が苦手か」「どういう環境であれば学習に向かえるのか」などについて学び、各学校の相談室やステップルームに生かしていくシステムがある。

以上

○閉 会